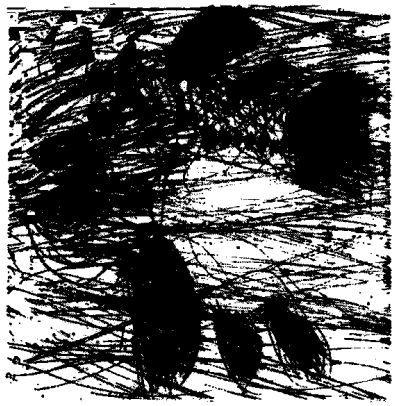
中上健次論

——幻視の地が孕むもの

明石福子

中上健次論

——幻視の地が孕むもの



明石福子

編集工房ノア

明石福子（あかし・よしこ）
1944年、兵庫県生まれ
1967年、大阪市立大学文学部国文科卒業
「暗河」の会会員
住所：福岡市南区皿山4丁目12の17

中上健次論——幻視の地が孕むもの
一九八八年一〇月五日発行

著　者　明石福子
発行者　涸沢純平
発行所　株式会社編集工房ノア
大阪市大淀区中津三—一七—五
電話〇六（三七三）三六四一
振替大阪四—三〇六四五七
印刷製本　隆文社
©1988 Yoshiko Akashi
0095-8818-764r
定価一八〇〇円
不良本はお取り替えいたします

中上健次論——幻視の地が孕むもの　目次

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

幻視の地が孕むもの　7
親和空間の崩壊　45
異界からの超克　89
引き裂かれたソウル　125
無縁の力とその行方　164
あとがき　204

装幀・粟津謙太郎

中上健次論——幻視の地が孕むもの

幻視の地が孕むもの

1

紀州新宮の「路地」。中上健次はその作品のほとんどを、この海と山と川に囲まれた土地を舞台に書きつづけてきた。「路地」を抜きには、中上健次を語ることは不可能だともいえる。なぜ彼は、これほどまで執拗にこの地にこだわりつづけるのだろうか。

彼が生まれ育った故郷であるからか。それはもちろんのことである。しかし、わが故郷を舞台に作品を書くというのは、ひとり中上健次に限ったことではない。どんな作家も、一度ならずも、自分の故郷を舞台にした作品を書くものである。むしろ、それがために小説を書くという場合もまれではないだろう。

しかしそうだとしても、中上健次の生地紀州新宮へのこだわりようは、並々ならぬものがあ

る。時にはうんざりさせられるほどのその執拗さは、いったい何なのだろう。中上健次を読む私にとっては、これは大きな謎としてあった。

この謎に対する解読例は、即座にいくつも並べられよう。

まずは、先にも述べたように、作者の故郷であること。しかも、「四方を山と海と川に囲まれた」地形的に他地域とは隔絶されたような地であること。

そしてその地形的な特徴に由来する、歴史的な背景も挙げられよう。つまり、敗れし者が流れ来たった地であるということ。大津皇子以来大逆事件に至るまで、非業の死を遂げた者の地霊の棲まう地でもある。

虚実入り混じって語り伝えられてきた、敗残者達が隠れ棲む「闇の国」「隠国(こもりく)」と作者のいうその熊野に抱かれた新宮。底深い闇の力に支えられたこの地は、小説の舞台としては、比類ないほどの豊かさを持った地であろうことは、その地を知らぬ者にも十分想像できるところである。しかも、舞台として切りとられた尖端としての「路地」は、闇の最たるものとしての被差別部落であった。

つまり、作者自身の言葉でもって一言でいえば、「ここは敗れた者、おとしめられた者、不具の者、異形の者、死んだ者の視線でつくられた国家」をもつ地であるということである。こうした地を舞台にとれば、いやでも錯綜した小説空間が出来上がってくるだろう。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

しかしこう並べてみても、私は未だ、私の抱いた謎を解きえたという満足感は得られなかった。単に小説の舞台として、その生地にこだわりつづけているはずではないだろう。何が、この作家の、その執拗さを支える力となっているのだろうか。

もちろん作者は、こうした読者の疑義に対して無意識であろうはずはない。彼は小説以外の場でも、生地新宮に対するこだわりようを、様々な機会をとらえては語ってきた。

特に同郷の詩人佐藤春夫を論じた文章では、生地新宮へのこだわりは、作家としての明確な意志によるものであることが示されている。生地新宮にこだわりつづけてきた中上健次は、当然のことながら、新宮という地を読解のキイとして、生地を同じくする佐藤春夫を読み進めていく。

物語＝自然への過敏はこの都出の者には拭いがたい事だが、私の生まれた所から五百米ほどしか離れていない、医家の長男に生まれた春夫は、物語＝自然の戦略を十分に持ち得なかったと言える。つまり、熊野の刻印が薄い。賤者の、癩者の都の何たるかに無自覚すぎ、熊野が孕んだ物語＝自然への反響の水爆の存在を気づかなかった。物語の歴史を見て、熊野抜きの物語をさがすのが困難だという事そのものを、幼少から漢詩漢文を読み、古典を読んだ春夫は自覚しなかったのである。つまり、断言すれば、物語への過敏も、物語や、物語の持つ法や制度の恐怖政治の犠牲も、この漢詩漢文により導き出されているのである。確かに、熊野は、ひらが

なやカタカナ、日本語読みされる漢字で出来た物語によって作られた物語そのもののブラックホールであるが、また、漢詩漢文でもある。春夫は、熊野を、漢文脈に置いたと言える。血糊も血泥も瘴気も、漢字という類を見ない何もかもパックしてしまう機能をもつ文字に封じ込める事が出来るかもしれぬが、私に言わせればそれは口あたりがよい効果も生んでしまいもする。熊野はもっと根深い。物語が在る限り熊野がブラックホールとして出来上って来る。

これは佐藤春夫批判であると同時に、中上健次自身の、熊野新宮へのこだわりの根拠を、あらためて宣言したものといえよう。佐藤春夫が無自覚であったのに対して、中上健次の熊野新宮へのこだわりは、小説の方法、戦略としてあるということが、彼のいう物語論をふまえた上で、簡潔に示されている。

しかしこの作者自身のことばも、私が抱いている謎の外縁をなぞっただけである。つまり私は、自分自身のことばで、この作家に感じている謎に、未だ十分には踏み込みえていないということだろうと思う。そのための手立てを得るにはやはり、作品そのものに向かわねばならない。

ところで、人にとって住処(すみか)とは何であろう。

ここに一つ、興味深い定義がある。

「住居の選定も人間生活の上では、最も広い意味での表現である」

磯田光一の『思想としての東京』の中の一節である。この一節を目にしたとき、一瞬戸惑いを覚えたものの、一刻あと、なるほどと感心したものである。

人はより快適な地を求めて、居を構える。これは言ってみれば、生存本能からくる欲求であるが、「表現」といえば確かに「表現」には違いない。そして、何を快適だと感じるかによって、〈表現者〉の位相が決まってくるわけである。

このことに関連して、つい先日みたばかりの、再放映されたNHKテレビのドキュメンタリー番組「二十一世紀は警告する」の中の一場面を思い出した。

末期症状を呈している都市の病巣を探ろうとした内容であったが、その一つに、タイの海岸線に貼りつくようにして並んでいるスラムが取りあげられていた。

タイ政府は、海岸を埋めたて港の近代化を図ろうとして、スラムの撤去命令を下す。スラム住民はやむなく、政府が用意した、人が住むに耐えないような新しい土地に移住する。

しかしそこでは暮らしは成り立たず、夫や父親たる男達は都心に働きに出る。仕事といっても疲弊し荒廃した都市には、ゴミの山をあさるようなことでしか糧を得る道はないのであるが、ともかく、移住によって家族はバラバラにならざるを得なくなる。新しい地が、彼らにとって快適な住処になるはずもなかった。

間もなく彼らは、政府の退去命令を無視して、元の海岸に戻り、そこで再び生活を始める。スラムに戻って来た彼らの暮らしに、活気が甦る。力強くギターを弾き語る青年の周りを取り囲み、彼らは底抜けに明るい笑顔をみせている。その嬉しくてたまらないといったような彼らの笑顔が、画面一杯アップで映し出される。

これは、「住居の選定」が紛れもなく一つの「表現」であることを、明確に示した一つの例であろう。そして彼ら〈表現者〉に対しては、様々な評価が与えられるに違いない。

いわく、下層民のたくましさを示して余りある。いわく、権力に抗しても、自分達の意志を貫いた革命的な人々であると。さらには、革命はスラムから等々、様々なことばが引き出されるかもしれない。

しかし果たして、人がある土地に住むということは、「表現」などという生やさしいことばで、掬いとることのできるものなのだろうか。

少なくとも、熊野新宮という二重三重に〈交通〉の途を断たれた地に、代々住まざるを得なかった人々にとっては、住むことは表現であるなどという言い廻しほど、無縁なものはないはずである。

それは、中上健次のことばを借りて言うならば、「文学主義に犯された」「人間中心主義」の産物とでもいうべきものであろう。そしてこの点に限っていうならば、磯田光一のこの定義は十全

に機能するものであり、小説家という、最も尖鋭的な表現者の跡を追った『思想としての東京』の中でも、その内実は完璧に極められている。

しかし、住居を表現という位相で捉えるには、あれかこれかの選択の余地があってはじめて可能になるものであろう。その余地が、そもそもの初めから拒まれている人間にとっては、住居は何と表すべきなのであろう。そして、その地を執拗に書きつづけてきた中上健次にとって、所与の地としてある熊野新宮は、一体何なのか。

2

熊野新宮は、確かに中上健次の言うように、物語に満ち満ちた地であるには違いない。そして、それ故に彼は、「最初は無自覚に、そのうち自覚して、小説の舞台のことごとくを〈紀州新宮〉と覚しき土地に持っていき物を書いて」きたわけであろう。

しかし、彼の生地へのこだわりようを、執拗に持続せしめた力を語るには、それだけでは不十分ではないだろうか。

では、何がその力たりえたのだろうか。

それは熊野新宮の、母性とでも呼ぶべき地の力によるもの、ではないだろうか。かの地は、単に「敗れた者、おとしめられた者、不具の者、異形の者、死んだ者の視線でつくられた（傍点引

用者）国家」であるばかりでなく、それら物語を生きる人物を孕み、産み落とし、育てあげるという、再生の力をもった地であるということである。

この力を感じるが故に、読者は中上健次の作品を、時には辟易しながらも読みつづけてきたわけであり、作家もまた、うんざりした読者の顔など意に介する風もなく、次々と熊野新宮、より正確を期すならば、熊野新宮の「路地」を書きつづけてきたはずである。

しかしこんなことは、作者にとってはもちろん、他の読者にとっても既に自明のことであったのかもしれない。が、私はつい最近読んだ『地の果て至上の時』と『日輪の翼』という、ともに「路地」の消えたあとの「路地」を描いた作品によって初めて気づかされたのである。

ことに「路地」ではない「路地」を描いた『日輪の翼』は、紀州新宮の地を離れてもなおも紀州の「路地」を再生しうることを示した作品であり、この作品によってあらためて、母なる地の力の限りないことを思い知らされた。

ところで、一時期私は、中上健次の作品を片っ端から読み漁ったことがある。そのときは快感を覚えるどころか、うんざりして途中で放棄してしまった。来る日も来る日も熊野新宮である。秋幸とその一族、あるいは彼らに類縁の人物が、手にした本の紙の上に、濃密な厚さでべたりと貼りついてしまったような、そんな重苦しさに捉われた。本を読む楽しさを覚えるどころか、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c